な場所であった。

最後に研修期間大変お世話になりました石井さん、西村さんをはじめ、テクノセンターの方々、各テナントの企業の方々に忙しい時間を割いて親切にご指導していただき心から感謝したい。

最終日の食事会にて

食堂の食事

テクノセンター　オフィス内

インド滞在日記

外国語学部
中国語学科３年

川上 翔平

国外内関わらずいろいろな旅行した人たちの旅行記はとてもたくさんあり、どれも違ったいろいろなスタイルがある。社会や世間体を無視して自分の道を突き進もうとするカッコいいものや、笑いを意識して読んでいてその国に行きたくなるようなもの。どの本も本嫌いな俺でも読むことができる。そんな旅行記の中でも俺が最も好きな本は、さくら剛という人が書いた「インドなんて二度と行くか！ボケ!!でもまた行きたいかも」である。結構有名な本なので読んだことがある人もいるかもしれない。俺は大分この本に影響されているところがあるので、文章もこの本に似た部分が多々あるだろうがあしからず。俺はこの本を多くの人でにぎわう本屋で読んだ。出だしから読んでないのだが笑いを堪えきれずに盛大に笑ってしまった。皆さんに恥をかかないためにもぜひ買って家で読むことをお勧めします。

日本脱出

俺は品川駅が大嫌いだ。２０１１年2月1日、民俗学のテストをすっぽかした俺は、品川駅のホームをうろうろしていた。

この品川駅という駅は、京急線とＪＲの乗換駅で、人の歩くスピードが速く、ぶつかりそうになることも多いので飛行機で来た地方の人や外国人の人たちがまず、最初に東京の洗礼を受けるところではないだろうか。

それに、一つのホームに違う行き先の電車が何台も止まるため、よく電車の電光掲示板と放送に注意していないと、成田空港に行きたいのにいつの間にか横須賀についてしまう。そうすると海軍カレーを食べて帰るだけになってしまう。

なぜ、俺がこの大切なテスト期間最終日に品川駅にいるかというと、それはインドに向かうためである。この日の夜、12時の飛行機に乗って、タイのバンコクを経由してインドのニューデリー（インディラ・ガンディー国際空港）に行くのだ。

夜の12時ならテストを受けてからでも十分間に合うのだが、初めての海外一人旅にビビッてしまった俺は、7時間前、すなわち、5時に家を出たのだ。自分でも感心する臆病さである。

山手線で品川駅に着いたのまでは良かったのだが、ここで、どの電車に乗っていいのかがわからず、小1時間ほどタイムロスをしてしまった。しかし、おかげでホームの整理をしているおじさんと仲良くなり、前を通るたびに挨拶を交わすほどになった。

何とか成田空港につき、3時間ほど瞑想をしたのち、無事にインドにつくことができた。この間、預けたバックにつけておいたバンダナがなくなっていたりしたが、多分それは盗まれたのではなく、バンダナが勝手に逃げ出したのであろう。

インドの最初の印象は、国際空港だけあってと

てもきれいで、人の表情も穏やかであり、俺は着いた瞬間、インドが大好きになった。

しかし、空港から一歩出た瞬間、その感想は崩れ去るのであった。

インドタクシーA

「ヘイジャパニーズ カモン チーププライス」

インドタクシーB

「ノーカムヒヤ ジャパニーズ」

インドタクシーC

「ハローウェアドゥユーゴー」

俺「うるせぇえええええええええええええ」

まことにうるさいインド人である、小さいころからとても可愛がられて育てられてきた俺には、このような下品な人たちとは次元が違うのである。

そこで、俺はタクシーという選択肢を捨てて、バスに乗り込むことにした。バスの中はあまりきれいではなかったものの、ぼられる心配もなく比較的快適であった。しかし、市内に近づくにつれて、アジアのBGMであるあらゆる乗り物のクラクションの音が大きくなり始めてきた。

この心地よい音色を聴きながらウトウトしていると、ニューデリーの中心部、コンノートプレースに着いた。着いたというか、バスがしっかりと止まるってくれなかったから飛び降りた。

バスから降りた途端に、いままでのことをすべて自分1人でやったんだ、俺ってスゲーという思いがこみあげてきて、感慨に耽っているとリクシャーに轢かれそうになった。インドで油断は禁物である。

ここでリクシャーの説明をしておこうと思う。皆さんは、タイのトゥクトゥクをご存じだろうか。あれと同じような乗り物である。

乗り方は、まず日本のタクシーと同じように手をあげて、リクシャーを捕まえる。日本では、ここで乗り込み、行き先を伝えるだけでいいのだが、インドでは、ここで値段の交渉対決が始まる。そして、交渉が成立して初めて乗っていいのだ。しかし、頑固なインド人だとなかなか値下げをしてくれない。たとえ交渉がうまくいったとしても、

リクシャー

目的地について運転手がやっぱ最初の値段にするとか言うこともある。駅前にいる奴は特に危険である。旅慣れてる人はこういった人たちを利用する手段を持っているが、最初は無視するのが一番である。とても面倒な乗り物である。だが、このリクシャーを使えば大抵行きたいところはすべていける。リクシャーと旅行者は切っても切れない関係で結ばれているのだ。首都周辺のリクシャーは写真の色のようなリクシャーが多い。だから、このリクシャーに乗れば詐欺にあうことはないというわけではなく、実際に俺はアーグラという町でこのリクシャーによくわからない宝石の店と布の店に連れて行かれた。とにかく、インドでのリクシャーに詐欺られるのは3度の食事と並ぶくらい恒例行事なのだ。

そこで、俺をひき殺しそうになったリクシャーでパハール・ガンジーに向かうことにした。ここは、世界中からバックパッカーが集まるところで、インド国内各地への列車が多く発着するニューデリー駅のすぐ西側に位置しており、交通の便も良い。また、格安のホテル、ゲストハウスの他にもレストラン、売店、ネットカフェ、服屋、土産物屋などの店がたくさんある。

俺は、この通りで手ごろな安宿を見つけ、レストランで食事を済ませ、眠りについた。

死者の街　バラナシ

いろいろなインド旅行記を見ていると、インドを旅する日本人にとってバラナシとは必ず一度は訪れるところであるらしい。そこで出発前、俺はバラナシについて調べてみた。しかし、そこには、「ガンジス川」、「火葬場」、「宗教」など、あまり興味をそそられなかった。そのため、世界遺産である「タージマハル」を見たついでにでも寄ってみよう、という考えで滞在期間は3日間の予定にした。

インド滞在5日目、「タージマハル」を現地の人は50ルピー（約100円）で入れるのに、謎の外国人入場料というもので750ルピー（約1500円）を取られて特に何の感想もないまま見終えた。インド旅行を考えている人はもしかしたら「タージマハル」なんか見なくていいかもしれない。どうしても見たいという人は「園内の偽ガイドに気をつけろ」とだけ言っておこう。

予定通りバラナシ来た俺は、いつもの通り宿探しをするため街をぶらぶらしていた。すると少しなまった日本語で、「こんにちは、お兄さん。ちょっとこっち来て。」

そこには、インド人がいた。

インド人はへたくそな日本語で話しかけてくることはよくある。だから、俺は無視して宿探しを続けた。手ごろな値段の宿を見つけた俺は、さっそくそこに荷物を置き街へ繰り出した。

しばらく歩いていると「ハイマイフレンド、また会いましたね。」

そこには、インド人がいた。

しつこいやつである。しかし、よく見ると歳も離れていなさそうだし、いいやつそうだから、こいつの相手をすることにした。

俺「なんだい、インド人？」

インド人「ここ俺の店。寄ってかない？チャイでも飲んでってよ。」

俺「そんなこと言って俺のこと騙す気だろ。」

インド人「そんなことないよ。俺の店有名なんだよ。」

ちょうど暇だったし、まぁいいかと思って、チャイを奢ってもらいに行くことにした。

店内には、色とりどりの布が飾ってあり、店長らしきインド人が1人いてそこら辺にあるシルク屋と何ら変わりはなかった。しかし、明らかにそれは日本のものである本がずらりと並んだ本棚と、明らかに日本人であるきれいな女性がいた。

店長（流暢な日本語で）「いらっしゃい、チャイ飲んでく？」

俺「えぇ？日本語できるんですか。」

店長「まぁね、この人、俺の奥さん。」

きれいな女性「こんにちは。」

店長「君、さっきバラナシに到着したでしょ。いろいろ案内してあげるよ。ビッキーよろしく。」

きれいな女性「楽しんで来てねー」

俺はこのビッキーという人にバラナシを案内してもらうことにした。ビッキーはとてもいいやつで、チャイを奢ってくれたり、いろんなところに連れて行ったりしてくれたりした。

先ほどの店は、本当に日本人の間では有名らしく、2010年発行のガイドブック「地球の歩き方」にも載っているほどであった。

その後、他の店の仲間たちとも仲良くなり、その日は夜遅くまでビッキーと店長（ムケさん）たちとしゃべっていた。

ここバラナシに3日の滞在予定だったが、あまりの居心地の良さに1週間、その後いろんな街を見た後また帰ってきて1週間、合計2週間滞在していた。

この2週間の出来事は自分の中で決して忘れることはできないものとなった。

ちょっと街を散歩すればインド人に詐欺られそうになったり、有名な火葬場に行けば偽ガイドが騙して来たり、日本では犬が歩くと棒にあたるが、インドでは詐欺師にあたるようだ。

結局バラナシには、日本帰国日の3日前までいてしまった。

最後の別れの日は、俺はあまりの帰りたくなさに思わず涙がでてきた。こいつらとはいろいろあったけど、最後は笑顔で別れよう。

出会いとは旅の醍醐味の1つであると俺は思う。しかし、出会いに別れはつきものであり、この別れはとてもつらかった。

俺は泣き顔を無理やり笑顔に変えて「さよなら」を告げに行った。一番仲の良かったビッキーは一緒に駅まで見送りに来てくれた。お互いに涙を堪えながら別れた。

さぁ、もうこの電車に乗れば俺の旅はほぼ終わりなんだ。そして5時間遅れで電車が到着し、2時間遅れでデリーに着いた。合計7時間遅れのおかげで悲しみなどどこか飛んでいった。

3月8日、デリーに着いた俺は、「お土産」を買いあさった。どうやらこの「お土産」というものは帰国の際には「パスポート」、「現金」と並んで大事なものであるみたいだ。この旅行で使ったお金は航空券代を除いて8万円なのだが、そのうちの2万円はお土産に取られた。ほんとに厄介な習慣だと思う。

まだまだ、ここに書いていないが、面白い出来事はたくさんある。

俺はインドに行って将来に対する考え方が180度変わった。そして、インドからある自信をもらった。「どこにいて何をしても、死なない程度なら何をしても大丈夫。」という自信である。

インドには人を引き付ける何かがあるとよく言われるが、それは、日本とは全く異なる環境で、かつ、現地人を信じるのにリスクを感じる場所に1人で長期間過ごすことができるという自信を与えてくれるからではないだろうか。

もし、気が向いて、いや、気が狂ってインドに行きたいと考え、実際にもうプランを考えてしまったあなた、どうかこの麻薬並みに中毒性をもつ「旅」にはまってしまわないことを祈っている。

“起飛（チーフェイ）”の活動を通して

外国語学部
中国語学科3年
安井 純

“起飛（チーフェイ）”の活動を通して

あなたは“起飛（チーフェイ）”をご存じだろうか？起飛は別名を中国研究部といい、神奈川大学公認の部活である。僕は今年3年生でこの部活に入り、そして入部したその日にいきなり起飛の部長となった。

何故入部したばかりの新入部員がいきなり部長になったかというと、今年4月の時点で部員が4年生しかいなかったからだ。もちろん就活や卒論に追われ忙しい4年生が部長をやるわけにもいかないので、僕は右も左も分からぬまま、いきなり部長となってしまった。

二胡とアルパの演奏会

起飛の主な活動は国際交流イベントを年3回開催し、“起飛新聞”を定期的に発行する事である。僕が部長になって最初の活動は、神大で行われた“二胡とアルパ”の演奏会を聴き、起飛新聞を作製する事であった。

中国楽器の二胡と南米のハープ、アルパは意外にも相性が抜群で、とても心地のよい音色を奏でた。また奏者の方の留学時代の経験や、東北でのチャリティー演奏などについてのお話も聞く事ができ、我々学生にとってとても為になる演奏会であった。

7月には国際交流会を行った。16号館の地下1階を利用して、レクリエーションやビンゴゲームを通して、留学生と日本の学生との親睦を深める事が目的である。僕たちは交流会の企画をし、ポスターを貼って宣伝をし、当日には30人程の参加者に集まって頂いた。

交流会は1時にスタートし、新聞島、○×ゲーム、伝言ゲームを行った。参加者の中にはお互いに初対面の人も多く、最初は少し緊張している様子もあったが、ゲームが始まると徐々に笑い声も大きくなり、参加者間の交流も活発になった。

レクリエーションの後、一等の図書券3千円相当を賭けたビンゴゲームを行った。読み上げられる数字に一喜一憂しながら、この日1番の盛り上がりをみせた。そして、賞品が尽きビンゴゲームが終わると、交流会最後のゲーム“じゃんけん列車”を